九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高麗考古学の諸問題

西谷，正

https://doi.org/10.15017/1866708

出版情報：史淵. 136, pp.123-158, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

高麗考古学の諸問題

西谷　正

一　はじめに

考古学が物質資料によって歴史構成を行うのであってみれば、文献史料が豊富にある中・近世も研究対象になることはいうまでもないことである。事実、日本考古学では、このところ中・近世考古学に関して、めざましい発掘調査や重要な研究成果を挙げている。筆者は、そのような学界状況に鑑みて、朝鮮半島の中・近世考古学の研究に着手して久しい[1]。そして、その成果は、一九九一（平成三）年いらい、九州大学文学部の考古学講義において、体系的に取り上げてきたところである。そこで今回、講義内容の一部を公けにし、こんごの研究の展開の基礎になればと思っている。今回は、中世・高麗考古学の諸問題を取り扱ったが、次回は、近世・李朝考古学を取り上げる予定である。

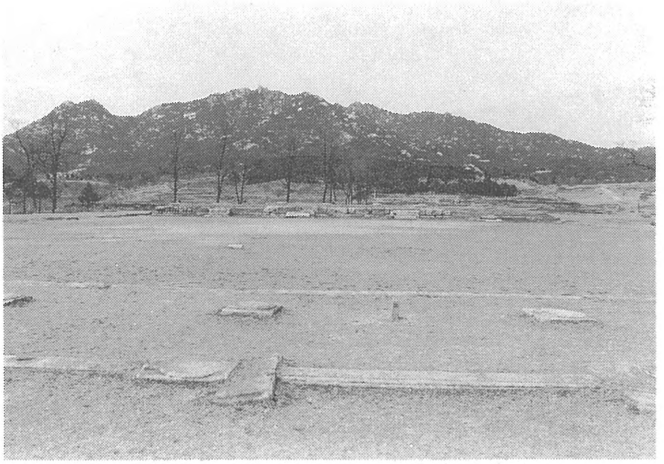
さて、統一新羅時代末期の動乱期に、朝鮮半島の中西部に当る松嶽郡、すなわち、現在の開城の豪族・王建（太祖）は、泰封の王であった弓裔を追い出して王位に登り、国号を高麗とした。それは、西暦九一八年のことである。王建は、首都を開城に定めた後、九三五（太祖一八）年には新羅を平和的に併合し、さらに翌年に後百済を

滅ぼして全国を統一した。太祖は、北方を開拓して、内政に力を尽すとともに、仏教を保護し、そして、古くからの貴族と土豪を抱き込んで統治体制を整備した。景宗・成宗代における国家の基盤整備を経て、第一一代文宗に至ると、田制・官制・兵制などあらゆる制度が細部にわたって完備し、中央集権的国家体制が完成した。ここに国運が隆盛し、文化の発達も目を見はるほどであったが、その後、武臣たちが台頭し、また、かれらの間で権力闘争が頻発するとともに、地方でも反乱が起り、国の形勢が非常に乱れた。武臣間の争いは一一九六（明宗二六）年、崔忠献の政権掌握で一段落し、王を傀儡とする崔氏一家の武断政治が始まった。崔氏の執権はしばらく続いたが、一二三一（高宗一八）年に蒙古軍が侵入してくると、王を奉って首都を江華島に移して抗戦した。やがて王権が回復した後、元宗は蒙古と講和し、一二六四（元宗五）年に開城に還都した。しかし、高麗は事実上、蒙古すなわち元の支配を受け、王は元の皇室と婚姻関係を結ぶことで命脈を維持した。その後、元の勢力が新たに起った明に押されると、恭愍王は元の勢力を追い出して、国権を回復した。ところが、朝廷の基盤を固める前に、中国の紅巾軍と倭寇が攻め寄せたため、王はそれらを防ぐため武臣たちを重用したので、李成桂のような新興の武将たちが勢いを得るようになった。そうして李成桂は実権を握り、一三九二（恭讓王四）年、ついに高麗王朝を打倒し、朝鮮王朝を建てたのである。(2)

二　開城の遺跡

前述のとおり、高麗の首都があったところは、朝鮮半島中西部、旧京畿道の西北部に位置するが、現在は朝鮮民主主義人民共和国の開城市に属する。開城の遺跡には、都城(3)・山城・寺院などが知られる。

太祖王建は、その二（九一九）年から宮殿を造営し、坊里を五部に分けたといわれる。王都は、当初、北の松嶽、南の龍岫山をはじめとする自然地形を防備線としたが、顕宗代に至って契丹の侵入に備えるため、周囲に土



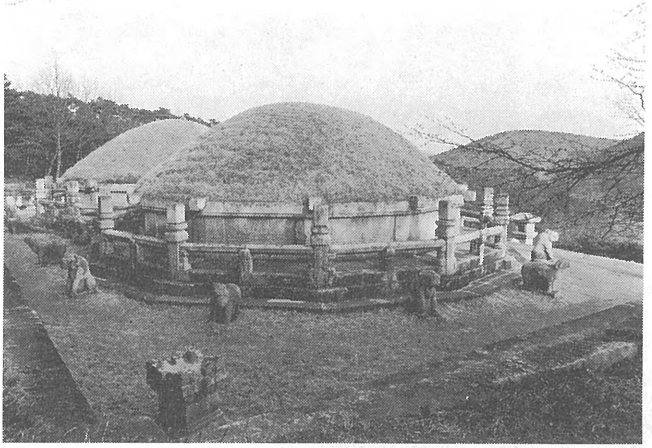
第1図　会慶殿門の礎石群と会慶殿基壇遺構　1986.4.17

築と一部重要部分に石築の羅城が築かれることになり、その二〇（一〇二九）年に完成したと伝えられる。総延長三六・二キロの城壁には大門四、中門八、小門一三の合計二五の城門を開いたことが『高麗史』に見える。

その中には発掘調査が行われたものがあり、各種の文献史料を参考にして、城門の比定が試みられている。四大門に限って紹介すると、南方に会賓門、東南方に長覇門、東方に崇仁門、そして、西方に宣義門がそれぞれ特定された。[4]

松嶽南麓には、満月台と称する王宮跡がある。王宮の正門である昇平門を入って奥に進むと、さらに神鳳門・閶闔門が南北一列に立ち並んでいた。その背後の高台には正殿である会慶殿のほか、長和殿・元徳殿・乾徳殿などが偉容を誇っていた。それらの建造物は高麗末期に消失したが、現在、王宮跡には殿堂や門廊の礎石がよく残り（第一図）、その付近では階段に使用した石龍頭が現存し、また、多数の瓦塼が出土する。満月台に対して、共和国では一部で発掘調査[5]を実施し、また、若干の研究[6]も知られる。

都城内では、広明寺・日月寺・法王寺などの寺院の造営が相ついで行われたが、寺院跡の実態はよくわかっていない。



第2図　恭愍王陵（後方）と同妃陵（手前）　1986.4.17

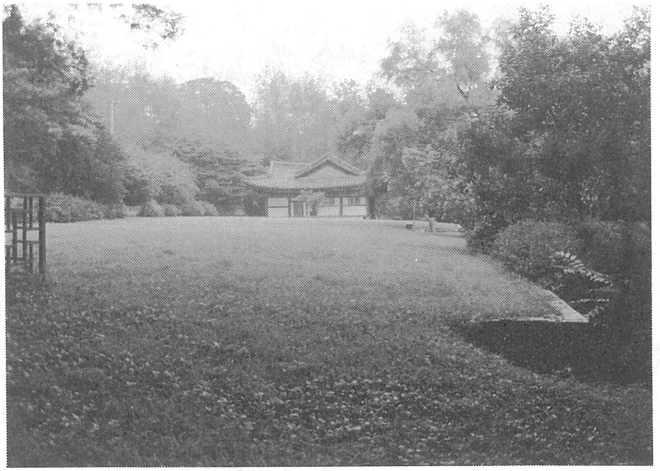
ただ、開城市の北東一二キロほどのところに位置する板門郡の仏日寺跡は、貯水池で水没するため、一九五九年と翌年に発掘調査が実施され、重要な成果を収めた。[7] 仏日寺は第四代光宗の二（九五一）年に創建されたが、李朝時代になって漢城へ遷都されてからは廃寺となっていた。調査の結果、寺域は三つの区画からなるが、中央区画では主要建物が南北一直線に並ぶ一塔式の伽藍配置であり、その西側にも塔を欠くが、付属伽藍をもつことがわかった。そのほか、舎利壇をはじめとする周辺の施設群が明らかにされた。また、五重石塔の移築に伴う解体工事の際、第一層と第二層の塔身内部から、金銅製塔三・小形石塔二二・舎利合子三が検出された。そして、金銅製のうち九重塔内からは、絹布で包まれた紙製陀羅尼経とガラス製瓶・念珠も見つかった。

開城市から北へおよそ二六キロの地点に築かれた大興山城は、海抜七六二メートルの高所に立地する。石築の城壁の総延長が七、八〇〇メートルに、自然の絶壁を利用したところが二、三〇〇メートルという巨大な山城として、首都防衛の重要な役割を担っていたとされる。大興山城に対する概要は報告されているが、[8] 発掘調査はまだ行われていない。

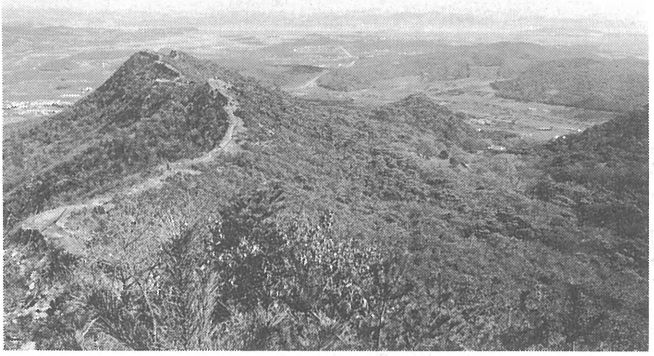
開城市に隣接する開豊郡には、太祖の顕陵をはじめ、恭愍王の王陵と同王妃の玄陵など、高麗王室の歴代の陵墓が知られる。そのうち、恭愍王・同王妃陵の周囲や正面前方に飾られた各種の石造装飾物や石人・石獣などは、彫刻としても優れた作品である（第二図）。高麗王陵に対する基礎的調査は、早く一九一六（大正五）年にさかのぼるが[9]、ここ二〇年ほどの間に、さらにいくつかが発掘調査[10]されている。そのうち、もっとも注目されるものは、高麗の太祖・王建の顕陵が一九九〇年代初に発掘調査されたこと[11]である。それによると、横穴式石室の玄室の四つの側壁と天井に壁画が見られた。とくに、松・竹・梅を見事に描いたもので、朝鮮半島最古の文人画といわれる。一九七八年に調査された第三代定宗の安陵は、横穴式石室に風景画・星宿図などの壁画が認められ、陶磁器などの遺物を若干出土[12]した。

三　江華島・珍島・済州島の遺跡

江華島は、一二三二（高宗一九）年に蒙古軍の侵入に対して長期抗戦を行うために、一時的に都邑が遷され、江都と呼ばれたところとして知られる。その後三九年間にわたって、



第3図　江華島の王宮跡　1995.9.1



第4図　三郎山城跡　1979.2.18

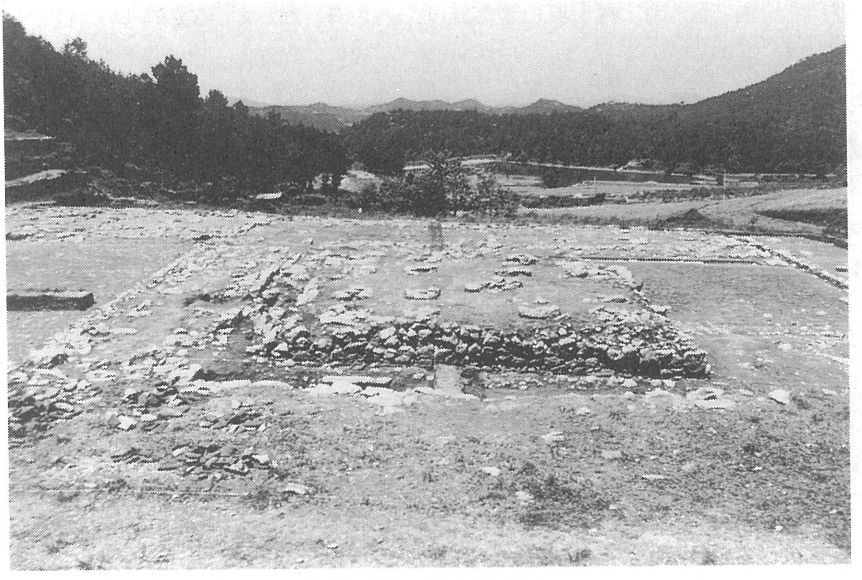
ここに王室が置かれていた。王宮跡と推定されるところは、現在、部分的に復元され、史跡として整備されている（第三図）が、それに先だって、一九七七年に発掘調査が行われた。しかし、遺構はほとんど消滅し、瓦片が出土しただけであった。王都の防備は二重の城壁で固められていたといわれるが、現在、その痕跡は部分的にしか認められない。それに対して、三郎山城は実によく遺存している（第四図）。そして、一九七六年には、八萬大蔵経木版が奉安されていた禅源寺の遺跡が、江華郡仙原面智山里で見つかり、実測調査[13]が実施された。その結果、大きく四層段から構成される山地伽藍であることが推定された。

高麗の王室が江華島から還都した一二七〇（元宗一一）年、崔氏執権時代に江華島守備の主力部隊であった三別抄は、蒙古勢力に対して反乱を起した。このとき、三別抄の指揮官であった裵仲孫は、王族の承化侯温を王として推戴した。そして、官府を設置して、官吏を任命する一方、沿岸警備を厳重にした。しかし、江華島内の人心が動揺し、文・武官の中に脱出する者が多くなると、裵仲孫は珍島へと移動を余儀なくされた。そこで、珍島を根拠地として沿海の州郡を掠奪した。

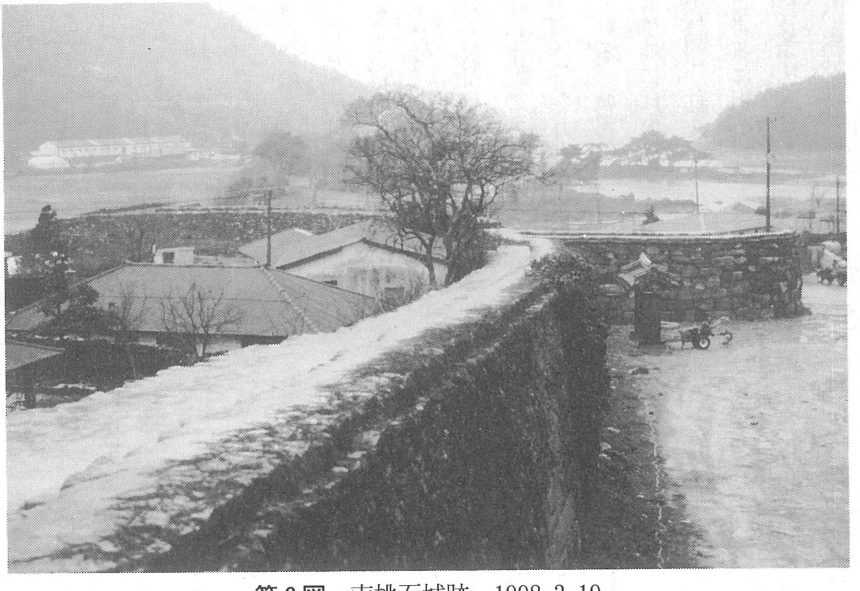
こうして、一時は済州島・巨済島などをはじめとした三〇余の島嶼を支配し、さながら海上王国をなした。三別抄の珍島における拠点は龍蔵城である（第五図）。ここに新たに官府を開いた三別抄は、いわば独立政府に相応しい部署を定め、宮殿と城郭を築いたわけである。龍蔵城跡は、史跡整備に先だって、一九八九年にはじめて本格的な発掘調査[14]が行われた。その結果、傾斜地に階段式に造成された用地に、回廊で囲まれた多数の建物群や豊富な瓦・陶磁器などが検出された。また、建物群のほぼ中央で見つかった方形基壇は木塔跡と推定された。そこで、まず寺院が建てられ、三別抄が入ってきてから宮城として活用されたと考えられた。珍島には、ほかにも戦死した裵仲孫将軍を追福するために造られたと伝えられる三尊石仏のある龍蔵寺跡や、同じく裵将軍が埋葬されているという南桃石城（第六図）などの遺跡があり、総合的な調査・研究が必要である。

ところで、裵仲孫将軍の率いる勢力が、金方慶の官軍と蒙古軍の連合軍によって破れると、一部は逃亡し、また一部の金通精が率いる三別抄は耽羅すなわち済州島に移った。そこで内外の二城を築いて、最後の抵抗を行ったが、一二七三（元宗一四）年にはついに破れて、三別抄の反乱は終わった。済州島における三別抄の最後の拠点として築かれたのが、缸波頭城である。現在、その遺跡は土城の西南部の一部が幅三メートル、高さ五メートル、長さ一キロにわたって見事に復元整備されている（第七図）。一九七八年の竣工の五年前に、南側の一部で発掘調査が行われたところ、下層で石築遺構や瓦が出土している。城郭の規模は周囲六キロとも、四キロともいわれるが、そのうち二キロほどがよく残っている。なお、遺跡地には小さな展示館があり、出土した瓦・陶磁器を展示しているほか、屋外には礎石類が展示されている（第八図）。缸波頭城は、済州島の城郭の中で最大規模をもち、また、土城としては唯一の例として、三別抄の本拠とするに相応しいものである。

宋錫範氏によると[15]、外城は土城で、周囲およそ六キロに及ぶ広大なもので、この付近の丘陵を起点として、南方盆地から平野一帯にかけて楕円形に展開している。一方、内城は金通精の居城であって、丘陵南側に位置する。

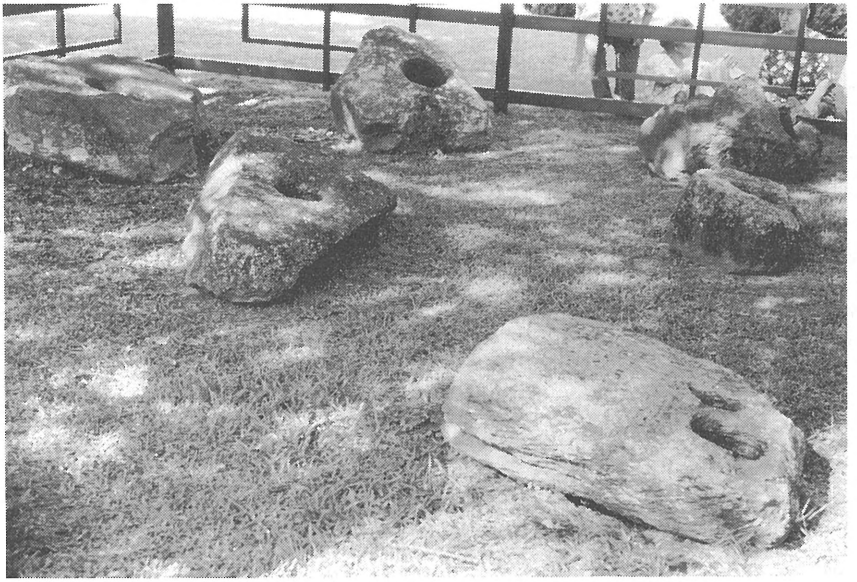


第5図　龍蔵城跡



第6図　南桃石城跡　1998.3.19

第７図　復元された缸波頭城跡の土塁　1979.2.8



第８図　缸波頭城跡発見の礎石群　1997.9.1

また、その北麓下には大旱魃でも渇れないという石泉があるともいわれる。関野雄氏は、古く一九三八（昭和一三）年にここを踏査されているが、関野氏によれば[16]、内城は一辺が一町半ばかり（百数十メートル）のほぼ正方形の小さなものといわれる。その付近には、かつて建物があったらしく無数の瓦の破片が散乱し、随所に高麗青磁の破片が散布していたそうである。そして、加工された石材も認められたといわれる。関野氏が踏査された当時、すでに内城の城壁はその数年前に取り除かれてしまっていたようで、関野氏は痕跡をとどめるにすぎなかったとも記されている。外城についても、平均十数尺の高さを保ち、切断面を見ると、土層と石塊層を交互に十数層重ねた形跡があり、土塁の築造の方法がうかがえるとして、貴重な記録を残された。

城郭の周囲には、運河を掘った痕跡も残っており、城郭西方の民墓の周囲に門跡の礎石が残っている。土城の外郭には瓦窯跡がよく遺存するといわれる。この瓦窯は、おそらく缸波頭城で使用する屋瓦の供給窯と思われる。このことに関連して、関野氏が一九三八年に採集された瓦の破片の中に、「高内村……辛丑二月……」と刻んだ文字瓦がある。関野氏は、高内村を現在の北済州郡涯月邑涯月面高内里で、この土城の西方六キロほどのところにある海辺の村落に比定されている。ここにも、缸波頭城への供給瓦窯があったのかもしれない。

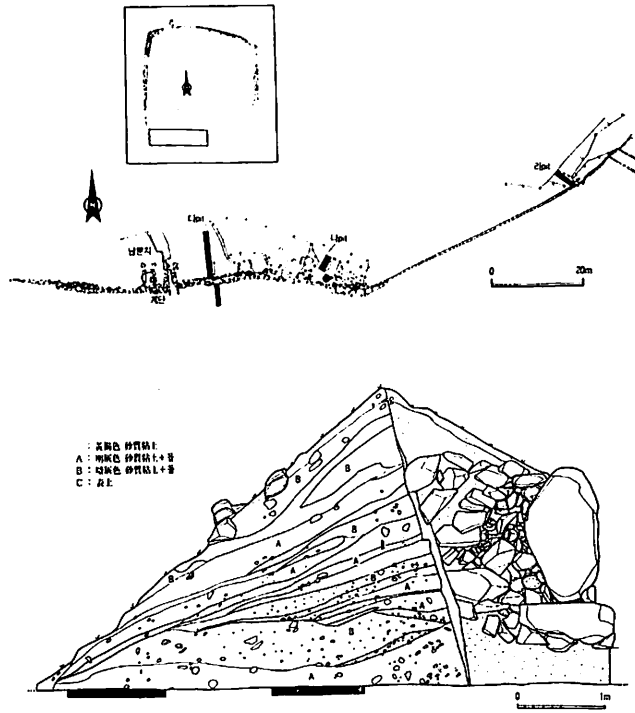
三別抄に係わる遺跡で注目されるものに、長城がある。『東国輿地勝覧』済州牧の古跡の条には、古長城として、「沿海環築、周三百余里、高麗元宗時、三別抄叛拠珍島、王遣侍郎高汝林等于耽羅、領兵一千以備之、因築長城」と見える。これについて、関野氏は、その遺跡を北済州郡旧左面下道里・南済州郡城山面温坪里・同新山里などの海岸に残る石塁を考えられた。それも、全島の海岸線に沿って海から上陸しやすいところにだけ、防御の目的で築いたものとされた。韓国では現在[17]、北済州郡朝天面北村里の還海長城を、その一部に当てる。石塁は、島内に随所に遺存しているが、ここの石塁がもっともよく残り、長さが五〇〇メートル、幅一～二メートル、高さ二～三メートルの規模である。

前述のとおり、三別抄は、一二七三年に済州島において、蒙古と高麗の連合軍によってその勢力が鎮圧されると、その翌年には、文永の役となって、こんどは日本が襲来を受けることになる。その意味でも、高麗や三別抄の考古学上の遺跡や遺物の調査・研究は重要な課題なのである。

四　山城・長城・鎮城

高麗時代においても、防衛施設として、各種の城郭が発達した。そのうち、釜山広域市釜山鎮区堂甘洞で、一九九四年末から翌年にかけて発掘調査された東平県城跡は、数少ない城郭の調査例である。ここでは、土塁が東西三〇五メートル、南北四四八メートルの範囲でほぼ楕円形にめぐり、総面積一〇八、四五四平方メートルの規模を有することや、東・西・南方に一つずつの城門を配していることなどが明らかにされた。また、出土した瓦の中に、「大平」という年号が刻まれたものがあるところから、一一世紀初つまり高麗初期の築造と推定[18]された。ここの土塁は版築によって積み上げられているが、内・外両側面は石築によって覆われていたようである。高麗時代の土塁は、そのほかにも土石混築や、瓦の破片を一定の厚さに敷いてから積み上げられたものなど多様[19]である。

さて、高麗が、北方からの契丹族などの侵入に備えて長城を築いたことは、早くから知られ、調査も行われた[20]。すなわち、千里長城[21]は、一一世紀の前半に、西は平安北道新義州市の鴨緑江河口付近から、東は咸鏡南道定平郡の東朝鮮湾まで、延々六三〇キロにわたって築かれた。一九八四年に新たに発見され、注目を引いているのは、平安北道の中部を北から南に流れている大寧江と、その支流の昌城江の東側に沿って築かれた、総延長約一二〇キロの大寧江長城である。一九八六年から翌年にかけて、二八個所で実施された発掘調査によって、高さ三〜七メートルほど遺存する土石混築の土塁の構造がわかり、高麗時代の瓦や陶磁器が多数出土[22]した。この長城には邑



第9図　長嚴鎮城跡の城壁

城や鎮城が付属するが、一七個所で発掘調査が行われた。長城から六〇〇メートルほど離れた位置にある博陵城は、周囲三・五キロの邑城で、内部は外城と内城に分かれている。長城の壁を西南壁として築いた寧辺山城は、鎮城としての機能をもつ。朝鮮半島中部西海岸を眼下に望む海抜四五メートルの丘陵地に築かれた、忠清南道舒川郡の長嚴鎮城に対する発掘調査[23]も重要である。周囲約四六〇メートルの小規模な、平地城に近い石築の山城であるが、城門と雉が二個所に設けられている。発掘調査の結果、城門や城壁の構造が明らかにされた（第九図）。

そのほか、平安北道枇峴郡の興化鎮城[24]は、初築は高句麗にさかのぼるが、高麗時代に修築を受けて再利用されている。一方、南方の外郭城としては、黄海北道沙里院市郊外の正方山城と洞仙関門[25]があり、首都開城の北方防衛に備えたものである。そのような地方の山城などと首都を連絡する烽火[27]についても、文献史学の側から基礎資料が提供されたので、こんごの考古学的調査が期待される。

五　寺院跡と仏教遺物

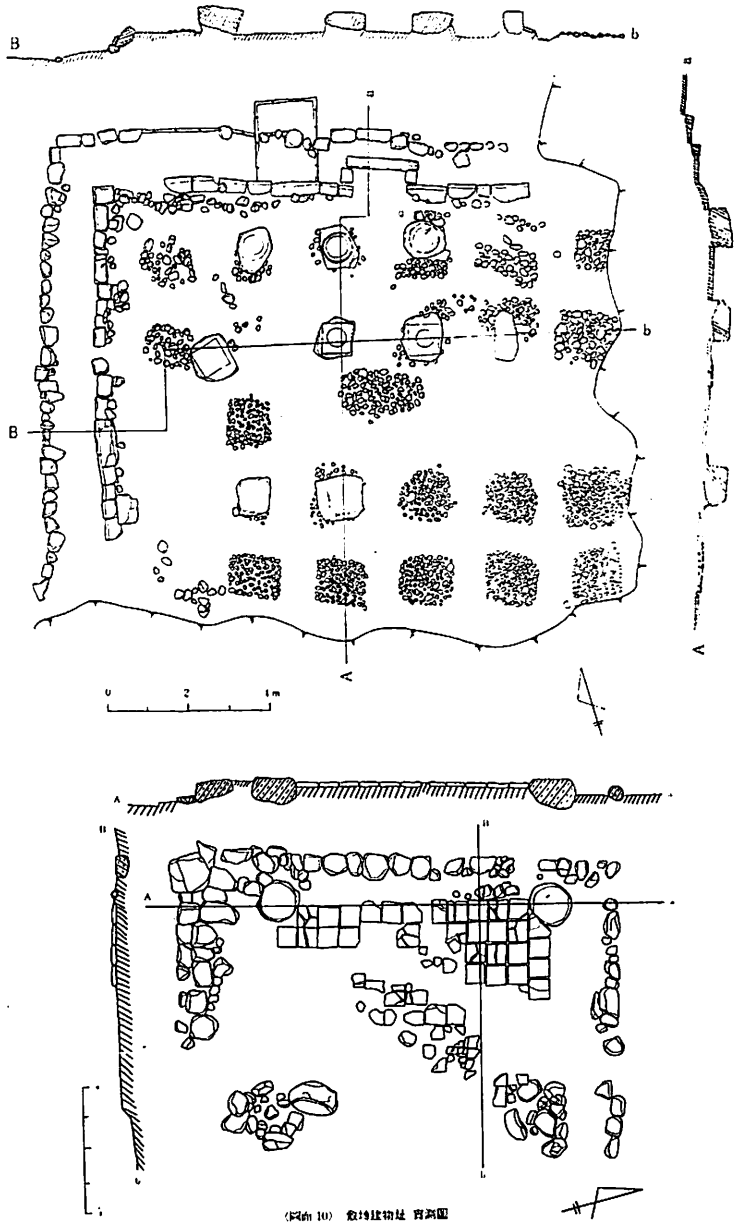
前述した首都開城の郊外に営まれた仏日寺の遺跡のほかにも、各地で寺院跡の発掘調査例が増加しつつある。まず、忠清北道中原郡の石窟寺院跡が発掘され、石窟の精密な実測図が完成した。[28] 忠清南道大徳郡の弥勒院跡は、高麗末期以後に地方豪族の黄氏一門と係わりがある寺院で、その遺構が明らかにされた。[29] 江原道襄陽郡の陳田寺跡（第一〇図）や、全羅北道南原郡の萬福寺跡もそれぞれ重要な発掘成果が見られた。[30] たとえば、萬福寺跡では、一九七九年から五次にわたって発掘調査が行われたところ、木塔を中心に、西・北・東側にそれぞれ金堂を配置するという、高麗ではじめての一塔三金堂形式の伽藍配置[31]であることがわかり、高句麗の清岩里廃寺との共通点が指摘されるにいたった。

高麗時代に創建されたり、あるいは、前代から引き続き高麗時代まで法灯が守られていた寺院跡に対する、重要な発掘調査例を列挙すると、次のとおりである。

江原道麟蹄郡・寒渓寺跡[32]
慶尚北道慶州市・錫杖寺跡[33]
同　軍威郡・麟角寺跡[34]
慶尚南道蔚州郡・澗月寺跡[35]
同　陜川郡・霊巌寺跡[36]
同　竹竹里廃寺跡[37]
同　天徳寺跡[38]
釜山広域市北区・萬徳寺跡[39]

第10図(1)　陳田寺跡　1979.3.29

第10図(2)　陳田寺跡の石塔　1979.3.29



第11図　興徳寺跡の建物遺構

忠清北道清州市・興徳寺跡[40]（第一一図）
忠清南道論山郡・開泰寺跡[41]
光州広域市東区・元暁寺跡[42]
全羅南道和順郡・雲住寺跡[43]
同　康津郡・月南寺跡[44]

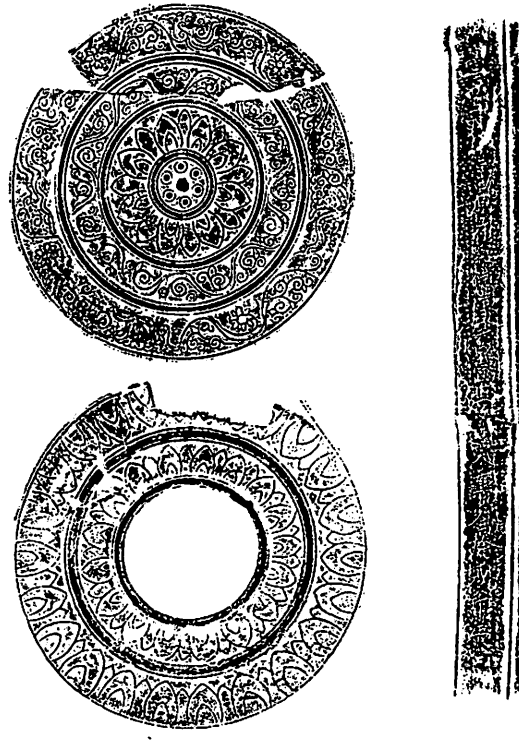
なお、高麗時代の寺院跡調査にとって、基礎資料が集成[45]されたことは、こんごの研究の展開に大きく稗益するであろう。

ところで、前述のような寺院跡の発掘調査においては、大量の屋瓦・陶磁器のほか、まれには仏像・梵鐘そのほか、仏教関係の遺物が出土する。

まず、屋瓦に関しては、統一新羅や渤海の系譜を引く各種の製品が知られる。それらに対する製作技術[46]や銘文[47]・紋様[48]などの研究は散見するが、本格的かつ体系的な分類や編年の研究は、まだじゅうぶんな展開を見せていない。その意味でも、瓦窯跡の発掘調査は重要であるが、慶尚北道の大邱市・龍水洞[49]や慶州市・東方洞[50]などにおける調査例は貴重である。

光州広域市東区の武珍城は、下層建物遺構が統一新羅時代にさかのぼるが、上層建物遺構は後三国時代から高麗時代初期にかけてのものである[51]。ここから出土した瓦の中には、「官」・「城」銘の文字瓦が含まれる。これらの文字瓦は、統一新羅時代末期から高麗時代初期にかけてのころ、建物の修理や再建などを契機に、特定の瓦窯で生産された可能性が高く、当時の瓦の生産体制[52]がうかがえる。

一方、日本古代の平安京出土瓦の分析と比較研究から、これまで慶州を中心に出土し、統一新羅時代の所産とされてきた瓦当の中に、高麗時代のものが含まれることが指摘[53]された。また、沖縄県における琉球時代のグスク



第12図　興徳寺跡出土の甲寅（954）年興徳寺禁口銘金鼓

出土の高麗系瓦は、高麗の瓦製作技術を継承した技術者の南島での生産[54]と考えられている。このような事実は、手工業生産における技術交流という点でも、こんごのさらなる研究が待たれる。

高麗の仏教関係遺物で顕著なものに、梵鐘[55]・金鼓[56]（第一二図）・香炉など、金属工芸品に優秀な製品が多い。仏教とは直接係わらないもの、金属工芸品[57]では銅鏡[58]も注目される。そのうち、梵鐘に関連した問題についてのみ若干触れておこう。このところ、日本では各地で古代から中世の梵鐘の鋳造遺構が知られるようになった。韓国でも慶尚北道月城郡の感恩寺跡において、同種の遺構が検出されたが[59]、寺院付属工房の問題を考える上で、対比資料として大いに参考になろう。また、銅鐘の撞座と上・下帯の文様の編年研究[60]は、瓦当の研究にも資するところが大きい。

六　墳墓

高麗の墓制[61]は、大きく分けると、土葬と火葬が知られる。そして、土葬には石室墓と、土壙墓もしくは木棺墓

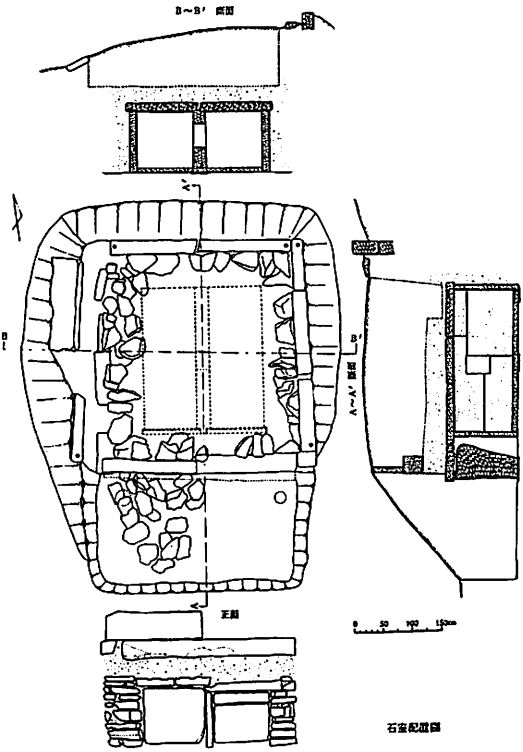
がある。早く大正五（一九一六）年に、開城周辺で盗掘が契機となって、王陵のいくつかが調査された。解放後の一九四七年には、国立博物館によって、法堂坊二号墳が調査された。その後、一九七〇年代の後半に入ると、上述したように、開城一帯では定宗の安陵を含む王陵四基と王妃陵一基が発掘調査されたが、そのほかにも、いわゆる民墓が一三〇余墓も調査[62]された。

ここで、高麗の墳墓を被葬者の階層性からいうと、王・王妃陵、貴族・官人墓、そして、一般の民墓などに分類されよう。まず、王・王妃陵においては、墳丘を有し、内部に横穴式石室を包蔵し、また、ときには壁画を描くものがある（第一三図）。このような様相は、中央・地方の貴族・官人墓でも見られる。その好例として、一九七一年に慶尚北道居昌郡の屯馬里[63]（第一四図）、一九八〇年に同安東郡の西三洞[64]、そして、一九九一年に京畿道坡州郡の瑞谷里でそれぞれ発見された壁画墳がある。

第13図　王建陵の樹木図

高麗の石室墳には竪穴式もあるが、忠清南道の扶余地方のそれらに対する資料集成や総合的分析[65]はすでに早く見られた。最近では、高麗の石室墳の起源を、高句麗の墓制を継承した渤海や新羅のそれに求める研究[66]、外部装飾あるいは施設の変遷についての考察[67]、さらには、石室墳の構造の類型化と編年研究[68]などに、成果が見られた。

高麗の貴族・官人・僧侶たちの中には、火葬[69]を行った後、小形の石棺を蔵骨容器としていることがある。その場合、四神図や唐草文などを彫刻[70]したり、墓誌を伴うことがある。火葬はもちろん仏教との関連性において、ま

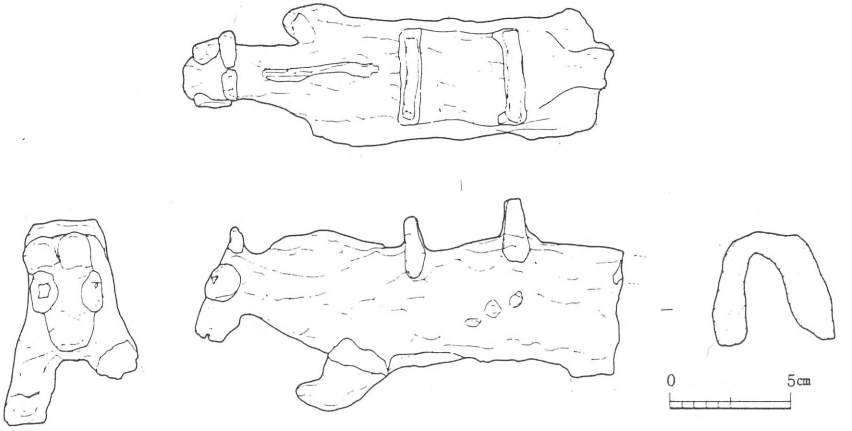


第14図　屯馬里の石室

た、墓誌は文字資料という点で、それぞれ高麗時代の文化や歴史の解明に重要な資料を提供する。たとえば、高麗中期の金仲文の墓誌銘の分析を通じて、高麗と蒙古との対外関係も論じられた。[71]

一般民衆の墳墓は、ふつう民墓と呼ばれる。現在の民墓もそうであるように、当時も土饅頭形をした小さな墳丘をもっている。学術的あるいは偶然に見つかった際に行われた、数多くの発掘調査例がある。すなわち、土壙墓・木棺墓・灰槨墓・石棺墓・小形竪穴式石室墓など実に多種多様である。内部からは日常的な生活用具である土器・陶磁器や銅製箸・匙など、若干の副葬品を伴うにすぎない。

高麗の民墓に対する本格的な発掘調査は、すでに早く大正五（一九一六）年にさかのぼる。すなわち、京畿道江華郡の外甫里[72]などで行われている。ごく最近では、一九九八年に、忠清北道清州市で木棺墓が調査されたが、「丹山烏」銘の墨や銅製箸・慶元通寶などが副葬されていて、一三世紀前半のものといわれる。[73]



第15図　月出山出土の土製馬

第16図　南海堂跡　1997.11.9

七　祭祀遺跡

朝鮮半島南西地方の海岸部にある全羅北道扶安郡の竹幕洞遺跡[74]は、三国時代百済のころ、航海の安全と豊漁を祈った祭祀遺跡としてよく知られるようになった。ところで、ここでは、高麗時代の土器・陶磁器・瓦などが出土するので、祭祀がその時期にも行われていたことがわかった。このことに関連して、高麗中期の高官であった尹彦頤の墓誌銘（毅宗四年（一一五〇））の内容は興味深い。つまり、尹彦頤は宋への遣使の帰途に、航海が危機に陥った際、断髪祈願[75]を行っているのである。

さて、全羅南道の霊巌郡と康津郡の境をなす、海抜八九〇メートルの月出山・天皇峰の山頂で発掘調査が行われたところ、祭祀遺跡が見つかった。『三国史記』によれば、新羅が名山大川に対して、大・中・小祀に分けて祭祀を行ったが、ここは、その小祀が行われた月奈岳に比定されてきたところである。調査結果によると、ここからは高麗時代の土器・陶磁器・土製馬（第一五図）・鉄製馬・瓦などが出土したので、高麗時代にも神祠があり、祭祀が行われたことが明らかにされた[76]。ちなみに、月出山からも近い南海堂跡（第一六図）は、国家の安寧と南海岸における農事の豊作を祈願して、南海神霊を祀った国家的な祭祀の遺跡である。ここのことは、『新増東国輿地勝覧』にも見え、おそらく高麗時代までさかのぼるものと推測される。このような祭祀に係わる遺跡や遺物の調査・研究は、こんごの大きな課題である。

八　陶磁器をめぐる問題

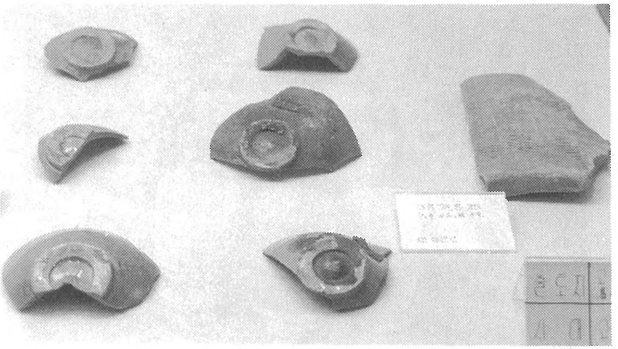
これまで取り上げてきた城郭・寺院・墳墓などの遺跡群から出土する遺物としては、陶磁器が代表的なものである。高麗といえば、各種の青磁に見事な作品を数多く生んだ。そこで陶磁器窯跡や墳墓が、ときには美術史家

によって発掘されたりもした。しかし、最近では、考古学者がそれらの遺跡の発掘調査に本格的に取り組むようになってきている。

調査・研究のもっとも基礎的で重要な作業は窯跡の分布調査であるが、それが朝鮮半島で最大規模を誇る全羅南道の康津郡で行われた[77]。この種の調査の継続的・全国的展開が望まれる。

高麗陶磁の古くて新しい課題の一つに、高麗青磁の起源問題[78]がある。まず、出現時期に関して、八世紀末・九世紀前半あるいは後半・一〇世紀前半などと諸説ある。しかし、高麗青磁が中国の越州窯青磁をモデルとして生まれたことや、その背景に新羅・高麗と唐・五代との交流史を考える点では共通している。ところが、高麗の初期青磁の特徴である、素文で直線的にまっすぐ外に開く体部、蛇目高台などの文様や形態にしても、また、背景となった交流史の問題にしても、それぞれ中国との比較や対応関係が未解決のままなのである。さらに、越州窯青磁と高麗の初期青磁の両者を出土している益山の弥勒寺跡や慶州の雁鴨池にしても、それぞれで年代幅のある大量の土器と少量の陶磁器の形式編年も実は確立していないのである。

一方、高麗青磁の起源をもっとも遅く一〇世紀後半とする見解[79]の論拠には、まず、緑青磁の問題がある。緑青磁は一九六四年に仁川広域市の景西洞窯跡が発掘調査されて以来、青磁の先駆的なものと考えられてきた。ところが、その後、全羅南道海南郡の珍山里一帯の窯跡群[80]や、同じく莞島郡の海底発見の陶磁器が調査された[81]結果、緑青磁はごく初期の青磁ではなく、一一世紀後半ごろに南海岸部で製作された地方用の粗質青磁の一つとされた。つぎに、初期青磁に特徴的な蛇目高台のある碗には、九世紀とか一〇世紀の年代のわかる資料がない。紀年銘資料としては、淳化四年（九九三）銘の壺や、全羅北道高敞郡の龍渓里窯跡出土の大平壬戌（一〇二二）銘のある平瓦だけであった。また、龍渓里窯跡出土品と、全羅南道康津郡の龍雲里九号窯跡において、蛇目高台碗と伴出した青磁陰刻菊草文碗などから考えて、蛇目高台碗を製作した窯を一〇世紀後半ごろから一一世紀後半ごろ



第17図　龍溪里窯跡出土の青磁と平瓦　1987.10.31

まで長期にわたるようである。さらに、蛇目高台碗を製作した窯は、およそ三つのグループに分けて考えられる。つまり、堆積層が大規模で、典型的な蛇目高台碗が生産されたところ、堆積層は小規模であるが、広範囲に広がり、典型的な碗が生産されたところ、そして、大規模な堆積層をなしているが、蛇目高台碗は稀れで、それも幅が広く、釉色と匣鉢に差異があるものなどである。そして、淳化四年銘壷は、最後のグループと関係があると推定された。

龍溪里の窯跡は、一九八三年に三基が発掘調査された。それらとともに、おそらく藁葺きの作業場跡と思われる遺構と、瓦葺き建物跡が検出されたが、その際に、大平壬戌銘の平瓦破片が出土した[82]（第一七図）。窯跡からは、典型的な蛇目高台碗のほか、陰刻蓮華文合子・広口瓶・瓜形水差・瓜形瓶・長頸瓶・扁壷・大鉢・托盞・皿・平鉢・小瓶などの陶磁器が出土した。これらの中には、莞島沖海底発見の一一世紀中ごろから後半の陶磁器と共通するものがあるといわれるので、龍溪里窯はかなりの年代幅があることになる。事実、窯跡は上・中・下の三層に大別される。そして、中層の窯の北壁には、大平壬戌銘平瓦と同種の平瓦片が混築されていた。したがって、蛇目高台碗についても、太平壬辰（一〇二二）すなわち一一世紀前半以前に年代の一点を求めることはできるが、上限年代については不明といわざるをえず、純青磁そのものの年代比定につながらない。ただ最近、

The celadon kiln sites discovered in Wonsan-ri, Pongchon County, South Hwanghae Province

第18図　円山里窯跡

釜山広域市釜山鎮区の東平県城跡が発掘調査され、明らかになった関連資料[83]は参考となる。ここでは、最下層から緑青磁と大平銘平瓦片が出土したことから、大平を太平（一〇二一～一〇三〇）年と推定し、東平県城跡は高麗時代初期に築造されたと考えられている。

ところで、淳化四年銘より一年さかのぼる淳化三年銘の青磁高坏を焼造した窯跡が、一九九一年までに黄海南道鳳川郡円山里[84]で発掘調査された（第一八図）。ここでは、淳化三年銘を含めて、合計七点の有銘青磁が検出された。そのほか、これまでによく知られているものとして、一九七八年に調査された、高麗第三代定宗（九四九年薨去）の安陵出土の青磁輪花鉢・皿・托や、一九六〇年に調査された仏日寺五重石塔（九五一年建立）出土の青磁合子などが知られる。このように見てくると、年代が

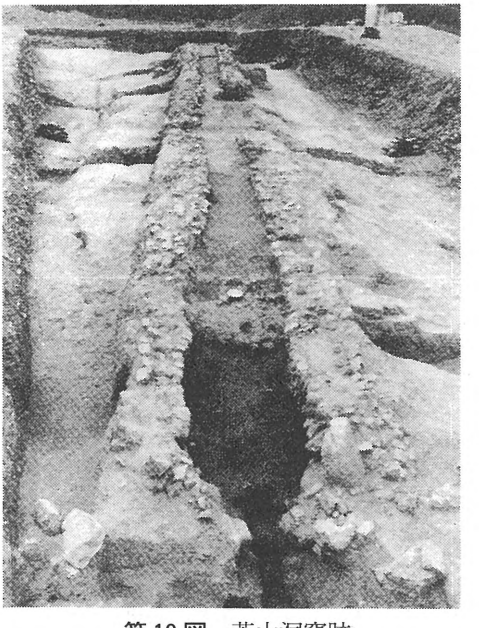
確かなものは、およそ一〇世紀中ごろから末年ということになろう。

高麗初期の窯跡は、一九九七～八年にも京畿道始興市の芳山洞において発掘調査[85]された（第一九図）。この窯では壁石を利用するなど、中国的な要素が多く見られるといわれる。また、出土した青磁は唐末五代の越州窯産の製品と類似するなど、中国の磁器製作技術を積極的に受容した例ではないかと考えられている。

一方、一九八四年以来、京畿道龍仁郡の西里では、一〇世紀ごろの軟質の白磁の窯跡が発掘調査[86]された。その際に行われた白磁に対する型式学的研究は注目される。ともあれ、陶磁器ばかりでなく、日常的に多く使われていたと思われる、ふつうの陶質土器[87]に対しても調査・研究を進める必要性を強く感じる。

高麗の陶磁器は、その起源が中国にあるとはいえ、いち早く高麗独自のものを創り出した。その結果、宋代には中国人もその美しさを絶賛するほどであった。そして、日本にも貿易陶磁として輸出されることになった。そこで、中国と高麗の磁器の比較研究[88]や、朝鮮半島出土の中国陶磁[89]、さらには中・朝間の技術交流[90]などの問題が重要になってくる。

他方、中国大陸でも、元の大都や遼の中京の遺跡をはじめ、各地で高麗青磁が出土[91]している。そのような脈絡から考えて、一九七五年の発見以後、九年間にわたって調査が行われた、朝鮮半島西南部の新安沖海底から引き



第19図　芳山洞窯跡

揚げられた大量の文物の中の高麗青磁七点についても、後述するように中国へもたらされていた高麗のアンティークと推測する。[92]

高麗の陶磁器は、もちろん日本列島にも輸入されている。[93]貿易陶磁としては、大量の中国製品に比べると、東南アジアの製品よりは上まわるものの、ごく少量である点が特徴的である。

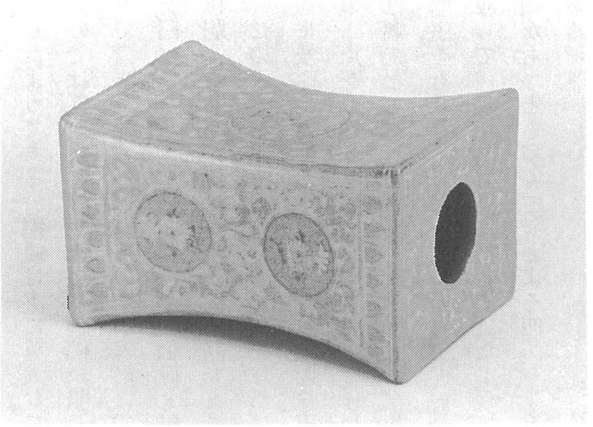
高麗陶磁の問題に限らず、きわめて重要な遺跡として、一九八一年に慈江道熙川市の西門洞で発見された、住居跡と推定されているものがある。ここでは、櫝とその周辺から全部で三二〇点余りの陶磁器・青銅器・鉄器類が出土した。櫝を覆っていた真鍮製の盥には壬子年の銘があり、種々の考証から一一九二年と推定された。[94]もしそうだとすると、共伴した高麗象嵌青磁や中国景徳鎮系の白磁の年代決定にも役立つものである。

九　新安沖と莞島沖の水中考古学

朝鮮半島における水中考古学の調査は、たまたま高麗時代の貿易船の沈没船に対して行われたことがその端緒となっている。それはいうまでもなく、いわゆる新安沖海底発見の沈没船である。続いて同じ全羅南道莞島郡の海域で、高麗の沈没船が見つかり、水中考古学に対する研究の関心が高まりを見せた。

新安沖の沈没船[95]は、水深約二〇メートルの海底で見つかった。引き揚げられた遺物は二万二千点を越えるが、とりわけ陶磁器がもっとも多く、二〇、六六一点を越える。そのほとんどが、中国の揚子江以南の沿岸の諸窯で焼造された製品である。そのうち、半分近くを占める青磁は龍泉窯系で、ついで多い白磁と青白磁は景徳鎮窯系である。そのほか建窯系の黒釉や、鈞窯系の白濁釉、吉州窯系の白釉黒画、雑釉などの陶磁器が認められるが、染付は一点も含まれていない。

さらに、大量の中国製陶磁器に混じって、高麗青磁と古瀬戸もきわめてわずかながら含まれていた。高麗青磁



第20図　青磁象嵌雲鶴菊唐草文枕

は全部で七点検出された。まず梅瓶は牡丹と唐草の文様を陽刻したものであるが、そのほかは五点の象嵌青磁と一点の純青磁である。すなわち、雲鶴文のある碗、唐草文を主とする盞托、雲鶴文と菊花文で飾った枕（第二〇図）、印花で菊花文を表した蓋、そして、獅子形硯滴である。そのうち、雲鶴文を象嵌した青磁の類品には、その形態や象嵌手法から見て、京畿道長湍郡の杜梅里にある明宗（一一七一～一一九七年在位）の智陵出土の荔枝文鉢や、前述の慈江道熙川市の西門洞の住居跡で、壬子年（一一九二）銘をもつ真鍮製盥と共伴した碗などがある。したがって、新安沖発見の象嵌青磁の古いものは、一二世紀後半に求められる。新しいものには、菊花文蓋があり、一三世紀末か一四世紀前半のものも含まれる。問題は古い青磁類であるが、後述のとおり、沈没船の年代が一四世紀の前半であることから、年代的に一〇〇年ほどのギャップが生じる。この点に関して、一二世紀前半のころになると、前述したように高麗青磁は中国人が絶賛するほど優品を生み出しており、中国の文献史料や出土資料から見て、高麗青磁の一部は高麗から宋へ輸出されていたことなどの諸事実を合わせ考えると、それらはすでに早く中国にもたらされていた高麗のアンティークであったとすべきであろう。そのほかの高麗製品には、

銅鏡などが認められるが、やはり同じコンテキストで理解できよう。ちなみに、これまで高麗製品と考えられてきた双鳳文柄鏡[96]については、宋代の中国製品である可能性が高い。

ところで、中国陶磁とともに量的に多いのが紫檀木と銅銭で、いずれも船底に格納されてバラストの役目を果たしたようである。銅銭は実に莫大な量にのぼり、二八トン一八キロ、個数にして八〇〇万枚を越えるが、古いものでは年代末詳の五銖銭や唐代の開元通寶から、もっとも新しいもので元代の至大通寶（一三〇八～一三一一）まで含まれる。そのほかの金属器には、祭器・燭台・和鏡・炊事道具・調理具などが知られる。石製品には硯や磨臼がある。さらに、瓦質小形仏像・扇・薬材・香料・ガラス製簪のほか、日本人船員の所持品かと思われる将棋駒・下駄や、日本からの輸出品でもあった漆器・日本刀鐔などもある。

このような出土遺物の中で、とりわけ興味深い木簡は、積荷に荷札として取り付けられていたもので、三六四点に及ぶ。木簡が示すもっとも重要な事実は、至治参年（一三二三）という年号銘の存在であり、沈没船の年代の一点をおさえることができる。つぎに、木簡に「綱司」と記したものが相当数知られるが、それは綱首もしくは綱主とも称し、平安・鎌倉時代に、九州の博多や筥崎などに居住していた中国系の貿易商人を指す。彼らは、船主をも兼ね、「大唐街」とか「宋人百堂」という記録に示されるような、いわば華僑街を博多の港町を中心に形成して、対中国貿易に当っていたようである。木簡に記された荷主名と思われる二七一点のうちには、さきの綱司がもっとも多くて、およそ四一パーセントに相当するので、積荷の半分近くを占める彼らが船主であったと考える。

ところで、陶磁器は、上述のとおり、龍泉窯系青磁など揚子江以南の沿岸の諸窯の製品がほとんどを占めるのに加えて、「慶元路」銘のある銅製分銅が検出されたことによって、船は、当時の公貿易港の一つであった、慶元すなわち現在の浙江省寧波市を出港し、日本の博多を目ざした日元間の貿易船であったと推定される。なお、船

第21図　莞島沖から引き揚げられた陶磁器

体はおよそ三分の二ほど遺存していた。船体の部材四四五点はすべてが引き揚げられ、復元的研究が進められた。その結果、原形はおよそ長さ三〇・一メートル、幅一〇・三メートル、高さ四メートル、二〇トンほどの比較的大形の船であったようである。

つぎに、新安沖からおよそ東南方へ一〇〇キロ余り離れた莞島沖の水深一二～一五メートルの海底で、高麗青磁などが大量に発見された（第二一図）。引き揚げられた遺物は、船材八一片、青磁三〇、六四五点、雑釉陶器二六点、青銅・鉄製品一八点、木製品九点、土製品二点、石製品一点の合計三〇、七〇一点にのぼる。[97]

陶磁器は、新安沖発見のそれを凌ぐ莫大な数量に達っした。陶磁器は大部分が青磁であり、ほかにはわずかに雑釉と呼ばれる黒褐釉陶器二六点と、灰青色硬質土器大壷・土器瓶各一点を含む程度である。青磁はほとんど無文であるが、ほかに梅瓶と長鼓十数点は鉄絵であり、また、陰刻線文・陽刻蓮弁文も若干見られる。青磁は、碗・皿・盌類で三万数百点を占め、そのほかは広口瓶一〇三点を除くと、梅瓶・長鼓・壷・扁壷・大鉢・油瓶・盞などがそれぞれ十数点から数点ほどである。黒褐釉陶

器には、大・中・小の壺、扁壺、鉢がある。

金属製品には、青銅製の匙・盌・鉢類と鉄製の釜があり、そして、木製品として木工具類や石製品には砥石がある。そのほか、トチンや匣鉢などの窯道具も出土している。

これらの遺物の年代に関しては、陶磁器における器形・文様・顔料・釉色・胎土・高台の処理・燔造手法などの諸特徴から、一一世紀中・後半ごろの文宗年間（一〇四七～一〇八二）に推定されている。ここで興味深いのは、沈没船の位置から西北方に六〇キロ付近に当る、全羅南道海南郡の珍山里一帯の海岸部に六キロにわたって二〇基以上に達っする大規模な青磁窯跡が知られる。前述のように、一部の窯跡は発掘されたが、この付近での採集陶磁器片と合わせ考えると、ここの製品は莞島沖発見の陶磁器と種々の点で一致する。このことから、莞島沖発見の陶磁器は、珍山里一帯で製作されたものと推測されるようになった。これらの陶磁器は、これまで知られてきた全羅北道扶安郡保安面や全羅南道康津郡大口面などでの製品とは、異なる諸特色を示すといわれる。扶安や康津の青磁が開城を中心とする王室用の高級品であるのに対して、莞島沖発見のものには、鉄絵青磁の長鼓や梅瓶に名品も若干含まれるが、大部分は碗を主とした、いわば日常生活用の青磁が多い。そこで、これらの需要層としては、済州島をはじめとする南海岸一帯と洛東江周辺の地方官庁、土豪および寺刹の生活用の供給品であった可能性が高いといわれる。なお、莞島沖発見の木造船は、復元すると、長さ一五～二〇メートル、幅四・五～四・六メートル、高さに二・三～二・四メートルの五〇～六〇トンになる、高麗初期の沿岸部運航用の小形船である。

最近では、全羅南道務安郡の道里浦でも、一四世紀後半ごろの象嵌青磁が数十点引き揚げられたり[98]、慶尚南道鎮海市の熊川で海底遺跡が発掘調査されるなど、水中考古学の地道な研究が進んでいる。熊川は、一四二六年（応永三三）に、日本船の停泊地として、いわゆる三浦が認められ、倭館が置かれた三浦の一つ薺浦の場所である。

そもそも三浦が認められたのは激増する倭寇に対応する処置の一つであったといわれる。熊川に近い馬山市には、合浦城跡が知られる。この城は、高麗末期に倭寇に備えて築かれたと伝えられる。そして、元寇の折には、ここが日本遠征の拠点の一つともなった。その合浦城跡に対する発掘調査[58]が実施された。元寇と高麗の関係についても、考古学的アプローチが必要な時期に来ているといえよう。

以上、高麗時代をめぐる考古学に関して、九項目を取り上げて、調査・研究の成果を紹介し、また、問題点を指摘した。こんごのさらなる展開を期したいものである（一九九八年一一月三〇日）。

〔注〕

(1) 西谷正、一九七五「一九七一年における朝鮮考古学の成果と課題」『朝鮮考古学年報』Vol. 2、東京。西谷正、一九八八「朝鮮考古学研究メモ13—高麗の遺跡と遺物」『同朋』一一七号、京都。

(2) 李弘稙編、一九七七『完璧国史大辞典』大栄出版社、ソウル。

(3) チョン・リョンチョル、一九八〇「高麗の首都開城城についての研究（1）（2）」『歴史科学』一九八〇年第二・三号、ピョンヤン。水谷昌義訳、一九八五「高麗の首都開城城についての研究」『朝鮮学報』第一一七輯、天理。

(4) 細野渉、一九九八「高麗時代の開城—羅城城門の比定を中心とする復元試案—」『朝鮮学報』第一六六輯。

(5) 開城博物館、一九八六「開城満月台の池と地下下水道施設物に対する調査発掘報告」『朝鮮考古研究』一九八六年第三号、ピョンヤン。

(6) チョン・チャンヨン、一九八九「満月台遺跡について（一）」『朝鮮考古研究』一九八九年第一号。チャン・サンリョル、一九八九「満月台会慶殿建築群に使った尺について」『朝鮮考古研究』一九八九年第三号。

(7) 水谷昌義編訳、一九八四「高麗仏日寺の調査・研究—近年の共和国の研究報告から—」『朝鮮学報』第一一三輯。

(8) チョン・リョンチョル、一九七九「開城の大興山城」『歴史科学』一九七九年第四号。

(9) 今西龍、一九一六「高麗諸陵墓調査報告書」『朝鮮総督府大正五年度古蹟調査報告』京城（ソウル）。
(10) 金鍾爀、一九八六「開城一帯の高麗王陵発掘報告（一）（二）」『朝鮮考古研究』一九八六年第一・二号。ワン・ソンス、一九九〇「開城一帯高麗王陵について」『朝鮮考古研究』一九九〇年第二号。
(11) 申鉉東、一九九四「朝鮮における最近の考古学事情」『東アジアの社会と経済—九三国際学術シンポジウム報告書—』大阪経済法科大学出版部、八尾。
(12) 金鍾爀、一九八六「開城一帯の高麗王陵発掘報告（一）」『朝鮮考古研究』一九八六年第一号。
(13) 文明大、一九七七「禅源寺址実測調査概要」『江華島学術調査報告書』第一冊、ソウル。
(14) 崔盛洛、一九九〇『珍島龍蔵城跡』『木浦大学校博物館学術叢書』第一八冊、木浦。
(15) 宋錫範、一九七三「古蹟篇—城址」『済州道文化財及遺蹟綜合調査報告書』済州。
(16) 関野雄、一九三八「済州島に於ける遺蹟」『考古学雑誌』第二八巻第一〇号、東京。
(17) 文化財研究所、一九七七『文化遺蹟総覧〈下巻〉』ソウル。
(18) 釜山広域市立博物館、一九九五『東平城址発掘調査指導委員会資料』釜山。
(19) キム・ミョンチョル、一九九一「高麗土城の築造形式と方法」『朝鮮考古研究』一九九一年第一号。
(20) 池内宏、一九二二『咸鏡南道咸興郡に於ける高麗時代の古城址　附　定平郡の長城』『朝鮮総督府大正八年度古蹟調査報告』第一冊、京城（ソウル）。
(21) チェ・ヒリム「千里長城の築造経緯とその位置について」『歴史科学』一九八三年第四号。
(22) 孫永鍾、一九八七「大寧江畔の古長城について」『歴史科学』一九八七年第二号。「大寧江長城調査報告」『朝鮮考古研究』一九八七年第二号。
(23) 国立扶余博物館、一九九七『舒川長巖鎮城』『国立扶余博物館古蹟調査報告』第五冊、扶余。
(24) チェ・ヒリム、一九八二「興化鎮城の位置と築造形式および時期についての研究」『歴史科学』一九八二年第四号。
(25) チャン・サンリョル、一九八五「高原陰守鎮城」『歴史科学』一九八五年第三号。
(26) チャン・サンリョル、一九八五「洞仙関門の建築年代と形式」『歴史科学』一九八五年第二号。
(27) リ・ヂョンソン、一九八五「高麗時期の烽燧について」『歴史科学』一九八五年第四号。

(28) 文化財研究所、一九七九『中原郡弥勒里石窟実測調査報告書』ソウル。
(29) 李東馥、一九七八『弥勒里寺址発掘調査報告書』『清州大学博物館古蹟調査報告書』第二冊、清州。金栄振、一九七九『弥勒里寺址二次発掘調査報告書』清州。秦弘燮、一九八二『弥勒里寺址三次発掘調査報告書』ソウル。金栄振・朴相俏・金昌會・一九九二『中原弥勒里寺址—四次発掘調査報告書—』『清州大学校博物館遺蹟調査報告書』第一一冊、清州。
(30) 檀国大学校中央博物館、一九八九『陜田寺址発掘報告書』『檀国大学校中央博物館古蹟調査報告書』第一二冊、ソウル。
(31) 尹徳香・郭長根、一九八六『萬福寺発掘調査報告書』全州。
(32) 麟蹄郡、一九八五『寒渓寺』麟蹄。
(33) 東国大学校慶州キャンパス博物館、一九九四『錫杖寺址』『東国大学校慶州キャンパス博物館』第四冊、慶州。
(34) 尹容鎭・崔兌先・金瑩和、一九九三『華山鱗角寺』『慶北大学校博物館叢書』二二、大邱。
(35) 沈奉謹、一九八五『蔚州澗月寺址I』『東亜大学校博物館古蹟調査報告書』第一〇冊、釜山。
(36) 沈奉謹、一九八五『陜川霊巌寺址I』『東亜大学校博物館古蹟調査報告書』第一一冊、釜山。
(37) 国立晋州博物館、一九八六『陜川竹竹里廃寺址』『国立晋州博物館遺蹟調査報告書』第一冊、晋州。
(38) 安春培、一九八六『居昌壬佛里天徳寺址』『釜山女子大学博物館遺蹟調査報告』第二輯、釜山。
(39) 釜山直轄市立博物館、一九九三『釜山萬徳寺址』『釜山直轄市立博物館遺蹟調査報告書』第七冊、釜山。
(40) 興徳寺址発掘調査団、一九八六『清州興徳寺址発掘調査報告書』清州。
(41) 李康承、一九九三『開泰寺I』『忠南大学校博物館叢書』第八輯、大田。忠南大学校博物館、一九八六『開泰寺三尊石仏殿創建基壇調査報告』大田。
(42) 徐聲勲・柳麻理、一九八三『元曉寺発掘調査報告書』光州。
(43) 全南大学校博物館、一九八四『雲住寺』。同、一九八八『雲住寺』二。同、一九九〇『雲住寺』三。同、一九九一『雲住寺総合学術調査』光州。
(44) 木浦大学校博物館、一九九五『月南寺址』『木浦大学校博物館学術叢書』第三六冊、務安。
(45) 斎藤忠、一九九七『高麗寺院史料集成』第一書房、東京。
(46) 崔兌先、一九九三『平瓦製作法の変遷についての研究』慶北大学校大学院文学碩士学位請求論文、大邱。清水信行、一九九八「韓

国論山郡開泰寺出土軒平瓦の製作技法について」『青山史学』第一六号、東京。
(47) 清水信行、一九九八「韓国論山郡開泰寺出土銘文瓦についての一考察」『日本考古学』第五号、東京。
(48) 徐五善、一九八五『韓国平瓦紋様の時代的変遷についての研究』忠南大学校大学院文学碩士学位請求論文、大田。朴銀卿、一九八九「高麗瓦当文様編年研究」『考古歴史学志』第四輯、釜山。
(49) 尹容鎭、一九八六『大邱龍水洞瓦窯址調査報告書』大邱。
(50) 国立慶州博物館、一九九三『慶州東方洞瓦窯址』慶州。
(51) 林永珍、一九八九・一九九〇『武珍古城Ⅰ・Ⅱ』光州。
(52) 吉井秀夫、一九九七「文字瓦からみた高麗時代における瓦生産体制—武珍古城出土瓦を中心に—」『朝鮮史研究会会報』第一二八号、東京・大阪。
(53) 上原真人、一九八〇「十一・十二世紀の瓦当文様の源流（上）（下）」『古代文化』第三二巻第五・六号、京都。
(54) 西谷正、一九八一「高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流—その考古学的研究序説—」『九州文化史研究所紀要』第二六号、福岡。下地安広、一九九七「朝鮮と琉球」『考古学による日本歴史』第一〇巻対外交渉、東京。
(55) 坪井良平、一九七四『朝鮮鐘』角川書店、東京。廉永夏、一九九一『韓国の鐘』ソウル大学校出版部。ソウル。キム・ヨンヂン、一九八九「朝鮮中世鐘の変遷と特徴」『朝鮮考古研究』一九八九年第四号。
(56) 沈奉謹、一九八六「高麗青銅飯子研究」『考古歴史学志』第二輯、釜山。
(57) チョ・テイル、一九八九「高麗の金属工芸発展と装飾技法」『朝鮮考古研究』一九八九年第一号。
(58) 李蘭暎、一九八三『韓国の銅鏡』韓国精神文化研究院、城南。
(59) 趙由典、一九八一「感恩寺址発掘調査概要」『古文化』第一九輯、ソウル。
(60) 朴銀卿、一九八七「統一新羅・高麗銅鐘の撞座と上・下帯文様に関する研究」『考古歴史学志』第三輯。
(61) 尹武炳、一九七五「韓国墓制の変遷」『忠南大学校人文科学論文集』第二巻第二号、大田。
(62) 金鍾爀、一九八六「前掲論文」。
(63) 文化財管理局、一九七四『居昌屯馬里壁画古墳及灰槨墓発掘調査報告』ソウル。
(64) 任世権、一九八一『西三洞壁画古墳』『安東大学博物館叢書』一、安東。

(65) 姜仁求、一九七五「扶余地方の高麗古墳と出土遺物」『湖南文化研究』第七輯、光州。
(66) リ・チャンオン、一九九一「高麗時期墳墓の淵源について」『朝鮮考古研究』一九九一年第二号。
(67) リ・チャンオン、一九九〇「高麗石室墳の諸問題」『朝鮮考古研究』一九九〇年第三号。
(68) キム・インチョル、一九九七「高麗石槨墳の類型とその変遷について」『朝鮮考古研究』一九九七年第三号。崔完奎、一九九七「百済地域横口式石槨墳研究」『百済研究』第二七輯、大田。
(69) 鄭吉子、一九八三「高麗時代火葬についての研究」『釜山史学』第七輯、釜山。
(70) 鄭吉子、一九八五「高麗貴族の組立式石棺とその線刻画研究」『歴史学報』第一〇八輯、ソウル。
(71) 金龍善、一九七九「金仲文墓誌銘」『美術資料』第二四号、ソウル。
(72) 今西龍、一九一六「前掲報告書」。
(73) 申鍾煥、一九九八「清州明岩洞収拾発掘調査概要」『博物館新聞』第三二五号、ソウル。
(74) 国立全州博物館、一九九四『扶安竹幕洞祭祀遺蹟』『国立全州博物館学術調査報告書』第一輯、全州。
(75) 山内晋次、一九九八「航海と祈りの諸相—日宋関係史研究の一齣として—」『古代文化』第五〇巻第九号、京都。
(76) 木浦大学校博物館・霊巌郡、一九九六『霊巌月出山祭祀遺跡』『木浦大学校博物館学術叢書』第三九冊、務安。
(77) 海剛陶磁美術館、一九九二『康津の青磁窯址』(『康津青磁窯址地表調査報告書』第一巻。)『海剛陶磁美術館叢書』第三冊、利川。
(78) 伊藤郁太郎、一九九一「高麗青磁の諸問題」「朝鮮史研究会論文集」第二九集、東京。
(79) 尹龍二、一九八六「高麗陶磁窯跡の研究」『考古美術』一七一・一七二、ソウル。
(80) 崔盛洛・崔健、一九九二『海南珍山里緑青磁窯址』『木浦大学校博物館学術叢書』第二七冊、務安。
(81) 文化財管理局、一九八五『莞島海底遺物(発掘報告書)』ソウル。
(82) 鄭明鎬・尹龍二、一九八五『高敞雅山ダム水没地区発掘調査報告書』裡里。
(83) 釜山広域市立博物館、一九九五『前掲資料』。
(84) キム・ヨンヂン、一九九一「黄海南道鳳川郡円山里青磁器窯跡発掘簡略報告」『朝鮮考古研究』一九九一年第二号。キム・ヨンヂン、一九九一「朝鮮磁器生産の始源問題について」『朝鮮考古研究』一九九一年第四号。キム・ヨンヂン、一九九二「朝鮮初期磁器相に関する研究(一)」『朝鮮考古研究』一九九二年第二号。

(85) 海剛陶磁美術館、一九九八「始興市芳山洞青磁白磁窯跡発掘調査概要」『博物館新聞』第三二六号。
(86) 李鍾宣・金載悅・朴淳発、一九八七『龍仁西里高麗白磁窯発掘調査報告書Ⅰ』『湖巌美術館研究叢書』第一輯、龍仁。
(87) 鄭明鎬、一九八六「高麗時代の土器」『考古美術』一七一・一七二。
(88) 金英媛、一九八六「高麗磁器と中国磁器の比較研究—高麗時代純青磁と中国陶磁の比較—」『考古美術』一七一・一七二。片山まび、一九九八「陶磁器から見た麗元関係」『高麗美術館研究紀要』第二号、京都。
(89) 崔淳雨、一九七七「韓国出土の宋代陶磁」『世界陶磁全集』第一二巻、東京。三上次男、一九七八「朝鮮半島出土の中国唐代陶磁とその史的意義」『朝鮮学報』第八七輯。
(90) 熊海堂、一九九二「朝鮮半島陶瓷技術対外交流史的比較研究」『考古歴史学志』第八輯。
(91) 陸明華、一九八八「略談上海博物館所蔵高麗瓷」『文物』一九八八年第六期、北京。
(92) 西谷正、一九八五「新安海底発見の木簡について」『九州文化史研究所紀要』第三〇号、福岡。
(93) 西谷正、一九八三「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要』第二八号。西谷正、一九八七「日本で出土した高麗青磁と中国陶磁」『韓国美術』第二巻、東京。西谷正、一九九四「日本出土の朝鮮陶磁—高麗青磁を中心として—」『東洋陶磁』第二二号、東京。西谷正、一九九六「韓国陶磁と日本の交流諸問題」『東洋陶磁』第二五号。
(94) チョン・チャンヨン、一九八三「熙川で新たに発見された西門洞遺跡」『歴史科学』一九八三年第四号。
(95) 西谷正、一九八五「前掲論文」。西谷正、一九八六「新安海底発見の木簡について（続）」『九州文化史研究所紀要』第三一号。西谷正、一九九〇「新安沖の海底遺物」『古代史復元　10　古代から中世へ』東京。山本信夫、一九九七「新安海底遺物」『考古学による日本歴史』第一〇巻　対外交渉、東京。西谷正、一九九八「新安沖沈没船の性格を考える」『古代探求　森浩一七〇の疑問』東京。
(96) 西谷正、一九九二「高麗の双鳳文柄鏡について」『郵政考古紀要』通巻一九冊。
(97) 文化財管理局、一九八五『前掲書』。
(98) 国立海洋遺物展示館、一九九五『務安道里浦海底遺物』（開館一周年記念特別展図録）木浦。
(99) 東亜大学校博物館、一九九一『馬山合浦城址基礎調査報告書』釜山。